

成果報告書

慶應義塾大学政策・メディア研究科 (HC)

修士課程 1 年 (82324221)

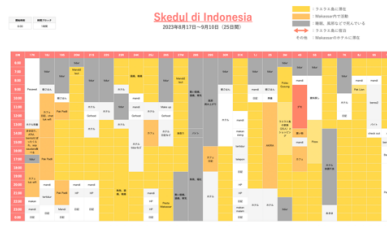
浦野里彩

1. 研究目的

本調査地であるラエラエ島は、インドネシア共和国・南スラウェシ州の都市マカッサルから船で 15 分ほどの場所に位置する小さな島である。ここでは現在、政府により新たな観光地の建設を目的とした強制的な埋め立てが計画されている。インドネシアの新聞記事によれば、この埋め立てはラエラエ島周辺に同じく新たな観光地として建設された Centre Point of Indonesia(以下 CPI)の用地で行われるはずであった土地分配の不足分として、南スラウェシ州政府と開発業者が合意した結果であった。彼らが埋め立てに反対する主な理由として、これまで数少ないメディアで報道され明らかにされてきたのは、経済的理由であった。というのも、ラエラエ島の住民の多くは、島沿岸で行われるエビ漁を行う漁師であり、獲れたエビを乾燥させ、本土マカッサル市で売ることによって生計を立てている。つまり、埋め立てが行われることによって沿岸漁業としてのエビ漁が出来なくなり、彼らは職を失うのである。しかし、社会運動論研究や人類学の学問的な思考を元にすれば、この島民の反対理由として経済的理由のみならず、他の理由も存在するのではないかとの疑問がある。本研究では、反対する理由の根本に、島や海、エビなどといった「もの」との関係で作られていた彼らのアイデンティティが揺らぐことに対する抵抗との意味合いがあると考え、埋め立てという危機によって現れ出た「もの」と「ひと」との相互作用によって生み出される彼らのアイデンティティの諸相を質的調査を行うことで明らかにする。

2. 研究成果①：フィールドワークと考察

2023 年 8 月 17 日～9 月 10 日までの計 25 日間、インドネシア共和国南スラウェシ州本土のマカッサルに滞在し、本研究を行った。調査地であるラエラエ島は、そこからモーターボートで約 10 分の場所にあるため、調査期間中は本土とラエラエ島を往復する形を取った。期間中のスケジュールの詳細は【表 1】に示すこととする。



【表 1】フィールドワークスケジュール

現地での調査で明らかになったこととして、4点を挙げる。第一に、彼らの職に関することである。フィールドワークを行う前はエビ漁で生計を立てていると考えていたが、エビを取ることが出来るのは3月～4月のみであると分かった。そして、彼らの言う“nelayan（漁師）”とはむしろ、観光客をモーターボートで本土から島に送ることがメインであり、エビ漁を行うのは一定期間のみであるとのことである。第二に、「もの」との関係との観点から見ると、大変に興味深いのは「海」との関係であった。彼らにとっての海は、生計を立てるために必要な「もの」というだけではなく、「何でも受け入れてくれるもの」、「生活の糧をくれるもの」、そして肝要なことには、「汚れを受け入れてくれるもの」であるとの認識を持っているように見えることである。彼らは何か汚れた物やゴミなどがあると、海に捨てる。ただ、彼らは海を大切にしていないわけではない。逆に、その「汚れを受け入れてくれる」寛容な海は、「大切にしなければ怒る存在」として認識されてもいた。人間が海を大切にしなければ、島の人間の中に入り込んで、その人をおかしくさせたりする。いきなりある島民が泣き出したり、怒り出したりする状況に対して、島民たちはそのような解釈をしていたのだ。第三に、調査期間中、埋め立て反対のデモに参加することが出来た。彼らは南スラウェシ州政府知事が働く場所の前で拡声器を使って意思を伝えた。州政府側も要人を派遣し、彼らの意思をラエラエ島民に伝えていたが、内容は埋め立てを強行するとの考えだけであった。彼らの訴え（インドネシア語）の訳は現在翻訳しているところである。内容として、経済的な理由以外のアイデンティティに関することが浮き彫りになることを期待する。第四に、マカッサルにあるハサヌディン大学において、ラエラエ島の歴史に関する資料を調べた。しかし、資料としてはっきりと歴史が記されているものは見当たらなかった。ただ、有力な情報として、ラエラエ島に最初に居住した島民が未だご存命であるとのことで、次のフィールドワークではその方に話を聞きたいと考えている。

3. 研究成果②：考察と今後に向けた展望

今回のフィールドワークを受け、ラエラエ島が埋め立てられるとの可能性を受け、島民のアイデンティティが「もの」との関係において、どのような様相を示しているかに関して明らかにすることを目的にした。結果として、着目すべきポイントとして見出されたのは、「海」であった。「海」に対する価値観や見方、そして人間との関わりをどのように理解し、解釈し、表現するかに焦点を当て、この研究を進めていくことが今後有意義になると考える。「海」を中心にして研究を組み立てる中でも、それを汚す存在でもある「ゴミ」に対してもフォーカスしていきたいと考えている。彼らにとって「海」は「ゴミ」を捨ててもその汚れを取ってくれるとの「浄化作用」を持つ存在であるのか？はたまた、自分たちが捨てる「ゴミ」は「海」にとっては無害であり自然なものであるが、企業や他人、つまり埋め立てする側が汚すことは自然ではなく有害であると考えているのか？今後、以上のようなリサーチクエストionsを掲げつつ、もう一度フィールドワークに行き、明らかにしていきたいと考えている。